

人生勝たなきや  
意味が無い

佐々木寿人

攻めて攻めて

攻め  
まくれ

若手注目  
No.1  
雀士の  
勝利論





人生勝たなきや意味が無い

佐々木寿人

星海社

34





## 開局 自分であるために、勝つ

年々焦っていたことは事実だった。

私はここ4年ほど、日本プロ麻雀連盟のB1リーグでもがいていた。スムーズに昇格していく後輩もいる中で、4年以上も昇格できずに同じリーグでもがいているプロは多くない。

日本プロ麻雀連盟では、団体の頂点である「鳳凰位」を争って、毎年各リーグを戦っている。鳳凰位は、数あるタイトルの中でも約30年の歴史を持つ権威あるタイトルだ。

私が最も獲りたいタイトルであるこの鳳凰位に挑戦できるのは、そのリーグカテゴリーの頂点であるA1リーグに所属する12名中の上位3名。だからまずA1リーグに入らなければ、挑む資格すら無い。

2013年1月12日。

鳳凰位に挑戦する前段階となるA2リーグへの昇格がかかった2012年度B1リーグ最終節。この日は36回目の誕生日でもあった。

四節終わった時点で、私は四位につけていた。最低でも二位までに入らなければ、A2リーグへの昇格はない。

**リスク覚悟で、とにかく攻め切る。**

そういう覚悟をもって対局に臨んだ。

最終節なので、各対局者はポイント状況を意識して臨んでくる。玉砕覚悟で来るプロもいれば、無理をしないで対局に臨める立場のプロもいる。

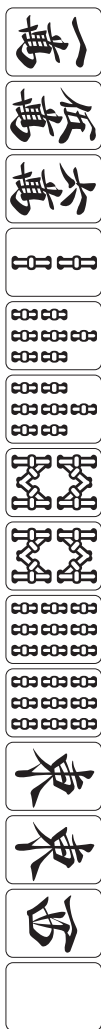
この時点での各ポイントは、一位+123・1、二位+99・9、三位+89・8、そして四位の私が+74・4。

大きくフリ込んだら「※」致命傷になるが、リスクを負ってでも前に出ていかなければな

らない順位だ。

第三節で苦渋を味わった焦りから来るミスだけは繰り返さないと心に刻んで卓についた。抱えてきた数知れない痛みを血とし、肉とし、骨とするために。迎えた初戦の東二局。親番【※2】でA図の配牌【※3】がやってきた。

A図 へ東二局 東家 ドラ【※4】



ダブル東【※5】・イーペーコー【※6】・ドラドラ。最低でも親で満貫【※7】が見込めるチャンス手である。

第一打西。二巡目ツモ【※8】東、打一萬。三巡目ツモ【※9】、打【 】。ツモ切りを二度した後、六巡目にツモ【※10】でB図のテンパイ【※9】。打【※10】でテンパイ即リーチ【※10】を打った。





まずはスタートダッシュを決めることができた。

一半荘目ハンチャン「※13」の勢いそのままに、二半荘目もトップに。しかし三半荘目。テンパイしてもかわされ、リーチを打つてもすべて空振りし、結果は四着。ただ四着にはなったが、昇格の条件ポイントを加味しながら、冷静にマイナスを最小限に食い止めることができた。四着だからといって、焦りは微塵みじんもなかった。

そして最後の半荘。その時点での累計ポイントは、一位の+163・1に続いて、私は+116・2の二位に浮上。昇格ラインの射程圏内に入っていた。三位のポイントは+104・6。



このまま確実に二位をキープするという守りの気持ちでは勝ち切れない。総合でもトップを目指して、攻めの姿勢を貫かなければ、三位以下から必ず追いつられるだろう。








攻めて攻めて攻めまくれ。私は手を緩めなかった。これまでの経験上でもそうだが、私の本能もそう叫んでいた。

次局が親番となる東三局。南家の私に、得意技であるホンイツ【※14】系のC図の手が配牌で入ってきた。

C図 へ東三局 南家 ドラ 



ホンイツに向かうためにはドラメンツ【※15】を切り出さなければならぬ配牌。早々に  かドラの  をツモってきたらメンツとして生かすが、現状のカンチャン待ち【※16】のままなら、ドラメンツであっても切り出していこうと配牌の時点で決めた。

そんな状況下で  が重なった。間髪入れずにドラ  を切った。  を仕掛け【※17】、打  として後、急所の  をチー。打  とし、D図の  のペンチャン待ち【※18】としたテンパイをとった。

D 図 へ東三局 南家 ドラ 〇〇〇〇〇〇



打**一萬**で、**東**と**二萬**とのシャンポン待ち【※19】に受けるという選択もあったが、打**二萬**に迷いはなかった。どちらもいい待ちとは言えないが、2メンツ仕掛けた状況で、**東**が出てくる可能性は低い。しかもこの局面では、親が端牌絡みで仕掛けており、他の字牌の切れ具合から、親が**東**をトイツ【※20】で持っている可能性が高かった。

ならば**東**のトイツを雀頭【※21】にし、河【※22】に1枚切れでも、確実に満貫になるペン**三萬**の**一気通貫**【※23】に受けたほうがアガリの可能性が高いという状況判断をした。

結果、ペン**三萬**をツモアガって満貫に仕上がった。

これがかきつけかけとなり、続く親番で6000オールをツモ。残りの局を油断せず丁寧に打牌し、最終的なポイントは+153・9となり、リーグトップ通過を果たせたのだ――。

私の生業は麻雀プロ。

2005年にプロデビューして以来、ずっと変わらず超攻撃的なスタイルを武器として  
いる。

「どうしたら勝てるようになれますか？」

アマチュアや若手プロからよく聞かれる。

私は聞き返す。

「なぜ勝たなければならないのでしょうか？」

理由が明確でなければ、勝つことにはこだわれない。「どう勝つか」以前に、「なぜ勝た  
たいのか」を明確にしておくべきなのだ。

「なぜ勝つのか？」、この質問は、私にとっては生き方に関わる問いであり、プロとしてそ  
の道を追求している者であれば、その物事に取り組む姿勢を問われているようにも感じる。

もしも、私が同じ質問を受けたら、以下のように答える。

「勝つことこそが、自分の生きている証だからです」と。

私にとって勝つこととは、自己実現の手段である。そして、生きるための手段でもある。勝つことでしか自分を表現することができない。仮にどこかで満足してしまつたら、そこで私は終わってしまう。

生きているかぎり求め続けていきたいものが、勝つことなのだ。  
青臭いと感じられるかもしれないが、偽らざる今の気持ちである。

しかし私は、勝つために必要とされるであろう「真の強さ」とはなんなのか、正直わかっていない。わからないからこそ、日々それを目指して稽古を積んでいるのだ。  
ただ、勝利を目指すにあたって、自分の中でこだわっていることがひとつある。

「即断即決」である。

自分の生業である麻雀はもちろん、普段の生活に至るまで、あらゆる局面において即断即決にこだわっている。

なぜ即断即決にこだわるようになったのか。

この姿勢を貫くために、どんな決意をしているのか。

そのために、日々どう闘い、生きているのか。

私の麻雀との向き合い方、勝利に向かう哲学、その根っこにある考え方。それを記したのが、この本である。

2013年5月

佐々木寿人

【※1】フリ込む アタリ牌を打ち込むこと。放銃とも言う。

【※2】親番 自分の風牌が東の人のこと。

【※3】配牌 1局の最初に各自が牌山から持ってきた手牌（親14枚、子13枚）。

【※4】ドラ アガったときに加点される特殊な牌。ドラ表示牌の次の牌がドラになる。ドラ表示牌が1

なら2、9なら1、**東**なら**南**、なら**發**といった具合。

【※5】ダブ東 東場の東家では、**東**のコーツ（カンツ）が2翻役になる。

【※6】イーペーコー 同じ種類で同じ数字のシュンツ（3つの数が連続した同じ種類の数牌）を2組作った役。鳴くと成立しない。

【※7】満貫 子は8000点、親は1万2000点。

【※8】ツモ 牌山から牌を持つてくる行為。ツモによってアガリ形が完成した場合は、ツモアガリと言う。

【※9】テンパイ あと1枚でアガれる状態のこと。

【※10】リーチ メンゼン（鳴いていない状態。鳴くとは、ポン、チー、ミンカンをして牌をさらすこと）でテンパイしたとき、牌の組み合わせに関係なく、宣言することで成立する役。

【※11】ロンアガリ 他家の捨て牌でアガること。

【※12】跳満 子で1万2000点。親で1万8000点。

【※13】**半荘** 東場と南場で1回戦とするゲーム方式。親が2周するまでが1ゲーム。東南戦と同義。

【※14】**ホンイツ** 漢字表記では「混一色」。文字通り、字牌と一種類の数牌だけをそろえた役。

【※15】**メンツ** シュンツ、コーツ（同じ牌3枚1組）、カンツ（同じ牌4枚1組）の総称。

【※16】**カンチャン待ち** 数牌で「1・3」なら2、「7・9」なら8のような1種類の牌をアガリ牌とするテンパイの形。

【※17】**仕掛け** 「鳴く」と同義。ポン（他家の捨て牌を利用してコーツを作るときの発声）、チー（上家の捨て牌を利用してシュンツを作るときの発声）、ミンカン（他家の牌を利用して作るカンツ）をして牌をさらすこと。

【※18】**ペンチャン待ち** 数牌で「1・2」なら3、「8・9」なら7のような1種類の牌をアガリ牌とするテンパイの形。

【※19】**シャンポン待ち** 3メンツ完成していて、2組のトイツがあるテンパイの形。

【※20】**トイツ** 同じ牌が2枚1組になっている状態。

【※21】**雀頭** アガリ形におけるトイツのこと。アタマとも言う。

【※22】**河** 手牌に使用しない牌を置く場所。

【※23】**一気通貫** 同じ種類の数牌を1から9まで1枚ずつそろえた役。



# 目次

東  
之  
章

飯を食うために勝て

16

南  
之  
章

百の技より挑む姿勢

42

西  
之  
章

逆境のときこそ攻めよ

102

北  
之  
章

即断即決が勝利を導く

160

ために勝て



# 飯を食らた

東

之

章



# どんなことにも全方で向き合う

私は麻雀プロである。

所属は日本プロ麻雀連盟。全国に支部を持ち、所属人数は現在600人強。数ある麻雀プロ団体の中では、所属人数が最も多い。

私のプロデビューは2005年。プロ入り1年目に「第20期新人王戦」第3位、「第10期チャンピオンズリーグ」優勝。

その後、デビューからずっと変わらず超攻撃的なスタイルを武器とし、2009年「第9回モンド21杯」優勝。2011年「第11回モンド杯」、2012年「第12回モンド杯」と連覇。その他に「第4回・第5回・第10回 天空麻雀」「第一期ロン2カップ」とタイトルを獲得してきた。

これから獲りたいタイトルは「鳳凰位」をはじめ「十段位」「王位」「麻雀最強位」等、

まだまだ山のようにある。

# とにかく中途半端が嫌い

初めて麻雀を知ったのは高校二年、16歳のときだった。

友達に誘われるまま、ルールをはじめ何ひとつわからないのに牌を握ったその日。麻雀というゲームの奥深さに魅せられた。

その晩、興奮して眠れなかったことは今でも鮮明に覚えている。翌朝すぐに入門書を買った。麻雀の役やくを1日で全部覚えた。牌も購入し、弟をむりやり練習相手に日々麻雀の研究にいそしんだ。

しかし高校三年になり、予備校に通うようになったとき、麻雀から離れた。

受験勉強のためだ。進学したらまた麻雀が打てる。それを目標に麻雀を封印し、受験勉強に没頭した。

無事合格した私は再び、大学で出会った新しい友人と麻雀漬けの日々を送っていた。

ただ大学三年になるとき、就職活動のためにまた麻雀を封印することを宣言した。

周りの友人が驚いたことは言うまでもない。

「合コンより麻雀が好きなお前から、麻雀をとったら何が残るんだ？」

「麻雀やりながらでも就職活動ぐらいできるだろ」

元々真面目な性格だったこともあるかもしれないが、大学受験のときと同じように就職活動に備え、自分に「禁麻雀」を課したのだ。

高校時代は無遅刻無欠席。通学中にバイクに引っかけられ、自転車のチェーンが外れて修復不能になっても、走りに走って5分前には学校に着いたぐらいだ。だから大学に入ってから、単位だけはきちんとして取得していた。

とにかく中途半端なことが嫌いだった。

# 予測できなかつた留年

そんな私にとって衝撃的なことが起こった。

大学三年になって初めてのホームルームのとき、自分の名前が呼ばれなかったのだ。

「まさか留年？ いや何かの間違いだ」

事務室へ走った。

「振り込み期限が昨日までだった学費が納められていませんので、三年へは上がれません。復学を望みたいのであれば、これから学費を納めていただいた後、もう一度二年生からになります」

職員への対応はあっさりとしたものだった。

頭の中が真っ白になった。

何度も頭を下げたが、規則だから無理ですと突っぱねられた。

やり場のない怒りが心の中に充満した。

「たった1日の遅れが認められない？」

「こんなに頭を下げているのに、もう一度二年生から？」

「規則って一体なんだ？ 俺の将来をなんだと思ってるんだ？」

そのとき、ハッと気がついた。

将来何になりたいのか、何ひとつ具体的に見えていなかったことに。

改めて考えた。

俺の将来って何だ？

目標って一体何だ？

何を目指して生きていけばいいのだ？

大学を卒業したら、なんとなくサラリーマンになるんだろうなあということぐらいしか、正直考えていなかった。

決断を先延ばしにしていたことに気づいた。いや、気づかされた。

それまで私は、自分の人生における決断をしてこなかったのだ。

# 人生が強制的にリセットされた



平凡に安穩に暮らしていた日々が、強制的にリセットされた。急転直下で自分と真摯に向き合わざるを得なくなった。それだけは、まぎれもない事実だった。

両親とも真剣に話し合った。母は泣いていた。テーブルには明日払うはずだったと父が言った数十万円の学費が置かれていた。

考えてみれば、母が泣いている姿を見たのは、このときが初めてだったかもしれない。心の奥底にあったやり場のない怒りが、急激に自分に向かってきた。

これは俺の責任ではないか！

学費は親に任せきり。それなのに「たった1日遅れただけ」だの「こんなに頭を下げているのに」だの、自分の責任を他人になすりつけているだけ。それなのに目の前にいる親は、何ひとつ将来が見えてもいない自分に、学費を払っても構わないと言ってくれている。自分はまた甘えてしまっているのだろうか？ ……わからない。どうしたらいいのかわからない。

明日からどうすればいいんだろうと考えたとき、無性に麻雀が打ちたくなかった。

牌を握れば、集中できる。牌を握れば、現状のすべてから解放される。牌を握っている束の間だけでも構わない。

あの緊迫した「勝負の場」に、自分を置きたかった。

翌朝。私の足は雀荘に向かっていた。決断を先延ばしにしたまま、麻雀に没頭した。2日間、無我夢中で打ち続けた。

だが打ち続けている間、揺れていた気持ちが決まった。

「これは自分の責任以外の何ものでもない」  
両親に甘えることはできない。何より、甘える自分を許せなかった。甘えたまま無為な1年間を過ごすことは考えられなかった。

小さい頃から、気持ちの切り替えだけは早かったほうかもしれない。

「なんとくではダメだ。やるならとことんだ」

自分から望んだ状況ではなく、強制的に置かれた「進級できない」という現況。

これまでは高校から大学へ、単にエスカレーター式のルールに乗っかっていたにすぎな

い。決断を先延ばしにしたまま、なんとなくサラリーマンになるんじゃないかというレールに。

しかし、これからは自分で決断する。そう心に決めた。

もちろん決断には不安がつきまとう。だが不安を打ち消すぐらいの責任を持てば、どんなレールだって選ぶことができる。行き先だって、自ら決めればいいのだ。

そう考えていくと、心が弾んできた。

力を込めて牌を握りしめた。

これまでのレールを外れたって構わない。どこに辿り着くのか、想像すらできないが、何はともあれ、やってみよう。

なんとなく向き合っていた麻雀から、とことん向き合う麻雀へ。

この道を究めたいと決断したのが「麻雀」だった。

私は、退学届を提出した。

「自分で決断したのであれば、思い切りやってみろ」

父は私の決断に賛同してくれた。

そして母も、自ら歩みだそうとしていた私の背中をそつと押ししてくれた。

「※」役 麻雀において、和了ホーラ〔アガること〕したときの手牌のパターン。

# これしかならぬと思うと強くなれる

雀荘メンバーという職業を知ったのは19歳、大学二年の夏だった。

「仕事で麻雀が打てて、なおかつ時給まで出るなんて最高じゃねえか」  
友人の一言を聞いた私は驚いた。

「世の中には、そんな夢のような仕事があるのか……」  
その晩、バイトを募集していた雀荘に電話をした。

1日の労働時間は9時間、最初の3日間は立ち番。慣れない革靴に長時間耐え、3日間を乗り切った後、麻雀を打てるようになった。

仲間内ではあったが、毎日牌に触れていたのので、麻雀面ではほぼ問題無し。後はサービスマスであることを意識して臨みなさいとのことだった。

いよいよ新馬戦出走である。

メンバーとして、見知らぬ人との初対局。指先は震えていた。

覚えていることといえば、トップを獲ったということのみ。対局内容なんてまるで覚えていないほど緊張していた。ただただ負けられないことで必死だった。

常連客に「小僧！」と罵られても、「お前だけには絶対に負けん！」と心の中で叫びながら、真つ赤な顔をして戦った。

元来の負けず嫌いな性格が生かされた最高の環境だったのだろう。

麻雀における私の土台は、ここで作られた。

# 麻雀における私の土台

便所掃除に始まり、ゴミ捨て、掃除機かけにペンキ塗り。雑用をこなしながら麻雀を打たせてもらった。

そんな繰り返しの中で初めて手にした1ヶ月のバイト代は、120回の対局で手取りは

16万円ほどだった。

店長からは、新人としては上出来だと言われたが、所詮1ヶ月トータルの成績表ではマイナス。しかしよく見ると、プラス域になっている者が誰一人いない。

「ならば俺がプラスを獲ってやる！ プラスになって初めて一人前だ」

自分にそう言い聞かせ、新たな気持ちでメンバー業に臨んだがプラスへの道のりは遠かった。

メンタル面がまだまだ弱かったのだろう。

プラスを獲るところか、マイナスがどんどん増えていった。そしていつしか、いくらやっても一緒なんだと、自分の中に言い訳が芽生え、わずか3ヶ月で退店した。

来年は就職活動という大事な1年を迎えることになるから、一旦麻雀を封印する時期としてもちようどいい。いい社会勉強になったと、強引に自分を納得させて半年程たった春、くだんの学費未納騒動が起きたのである。

雀荘のマネージャーに事情を話し、再びメンバーとして復帰させてもらった。

これしかないと思うと、強くなれるのだろうか――。

復帰したその月に初めて、トータルでプラスを記録すると、そこから4ヶ月連続でプラスを記録。対局数は毎月200を超え、バイトながら成績一番手の地位を獲得した。打ち手としての実績が買われ、夏には富山県まで出張に連れてもらったこともあった。

そんな生活を続けていたとき、マネージャーから新宿歌舞伎町に出す新店舗のメンバーにならないかと声をかけてもらった。

待遇は月給38万円で休みは週一回。ゲーム代が1回200円。破格の待遇である。

なにより新宿歌舞伎町という新しい環境で、自分が通用するのかどうか、試してみたかった。



# 歌舞伎町での過酷な日々

しかし待遇がいい裏には、過酷な条件が待っていた。それは1ヶ月の平均対局数だ。実家の仙台にいたときの雀荘時代に比べると、3倍以上の650回がノルマだった。

東風戦※とはいえ、ゲームだけで月に13万円は自動的に引かれることになる。寮があったから家賃はかからなかったが、実質25万円の手取り。要するに12時間勤務して、東風戦を1日平均25回打つという条件だった。

私の中で意識改革が始まった。

勝つという目標に向かって、意識のすべてを傾けていったのだ。

12時間で東風戦を25回、これを週6日連続。

言わずもがな、体力が必須となる。体力はもちろんだが、思考能力も欠かせない。頭が

ポーツとしていたのでは、対局中にミスが増える。それでは仕事にならない。

となれば当然、日々の睡眠が大切になってくる。

私はまず、睡眠時間を1分でも多く確保するために自転車を購入した。

新宿歌舞伎町の外れにあった寮から、歌舞伎町と真ん中にあった店までは、歩けば10分ほどの距離。往復しても20分だが、自転車なら片道2分もかからない。

仕事が終わった途端、張りつめていたものがプツンと切れるので、体も心もポロポロになる。一目散に帰ってすぐ寝るにこしたことはない。それに自転車なら、客引きや酔っぱらいに絡まれることも無い。繁華街に渦巻く欲望や誘惑に負けることも無い。

さらに週に一度の休日は完全休養日とし、そのほとんどを睡眠にあてた。

周りのメンバー達は競馬、競艇、風俗等に稼いだ金を撒き散らかしていたが、私はいっさい付き合わなかった。

自分は仙台から出稼ぎに来ているのであり、新宿に金を還元しに来ているのではないという意識が根底にあった。日々の生活で金を撒き散らかしているようでは、お金も貯まるわけがないと、自分に強く言い聞かせていた。

メンバー達からは「お前のストイックさはすごいよ」と言われたが、「私がすごいのでは

なく、あんたらがだらしないんだよ」と、なかば強引に彼らを反面教師にし、自分だけの世界を作りあげていった。

周りに同調しないことによって、孤立するのならそれでも構わないとも思っていた。

**麻雀で勝つこと以外に面白いことはどこにもなかった。**特に買いたいものがあつたわけでもない。唯一の贅沢は、給料日に焼き肉を食べることぐらい。

だからお金はほとんど使わず、貯めていった。貯めていくことしか、自分の勝つた証がなかった。手渡しでもらった給料をその日に貯金し、数字が増えたことを確認できたときが、生きていることを実感できた唯一の瞬間だった。

勝つことでしか、自分の存在価値を見い出せなかった。

生きていくために、勝ち続けなければならなかった。

【※】**東風戦** 東場だけで勝敗を決めるゲーム方式。4人の親が1周するまでが1ゲームとなるので、最

短だと4局になる。

# 孤独の先に見えた光

勝つことだけに意識を傾けていった私は、脇目も振らずメンバー業に没頭した。しかし没頭すればするほど、孤独な自分を感じていた。

雀荘メンバーの仕事を、長く続けられている人は多くない。入れ替わりも頻繁で、ひと月も経たないうちに辞めていくメンバーもいた。

新宿に誘ってくれたマネージャーから言われたことがある。

「お前には本当に悪いことをした。この世界にお前を深く引きずり込んでしまったことを、俺は心底後悔している。なんでもいいから他の仕事をやってくれないかといつも思っているんだ」

マネージャーだから、私が勝ち続けていたことはもちろん知っていた。そのうえで、この世界でプレーヤーとして食っていけるのは、ほんのひと握りだから厳しいぞと言ってく

れていたのだ。

業界をよく知っているマネージャーだけに、重い言葉であることはわかっていた。ならばそのひと握りに、なんとしても辿り着いてやる。それでは自分には恩返しはできないと思っていた。

だからなおさら、飢えた獣のように打ち続けていた。

# 本物のプロとの出会い

そんな気持ちで日々の対局に臨んでいたある日、フリーの客として日本プロ麻雀連盟の前原雄大プロが来店してきた。

当時、私は前原プロの雑誌連載を読んでいたのです、その存在を知っていた。

連載が面白いうえ、リーグ戦のページをめくれば、ダントツで首位を突っ走っている。「めっちゃくちゃ強ええんだろうなあ」という印象を持っていて、一度でいいから同卓してみたい人でもあった。

そのプロが、いきなり目の前に現れたのだ。

プロが来店することは、それまでも何度かあった。でも歯ごたえが感じられるようなプロに出会ったことは、一度も無かった。

放銃はなはしないけど、その代わりアガリも少ない。それが強さでもあり、カッコいいのだという風潮に染まったプロが多かった。

月間成績がトップだった私は、店長から行ってこいと背中を押してもらった。

夢にまでみた前原プロとの対局。私は意気込んだ。卓に座れば誰でも対等である。自信がないわけではなかった。一番手としてのプライドもあった。

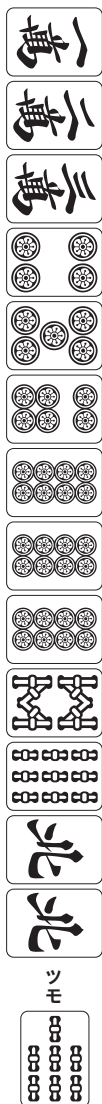
しかし、そんな陳腐なプライドは一瞬にして吹っ飛んだ。

東一局五巡目。西家の前原プロからリーチが飛んできた。前原プロは一発ひとでツモアがった。アガリ形はA図。



を

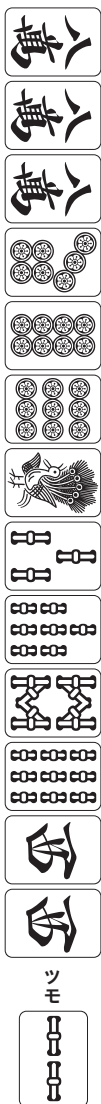
A図 (東一局 西家 ドラ 四萬)



リーチ・一発・ツモ・裏ドラ「※3」がひとつ乗って2000 / 4000点の満貫。

続いて東二局六巡目。南家となった前原プロからまたリーチ。B図の手牌でツモアガった。

B図 (東二局 南家 ドラ 中)



リーチ・一発・ツモ・裏ドラがだったので、二局連続満貫のツモアガリ。



ともに役はリーチのみ。一発も裏ドラもなければ、リーチ・ツモで500/1000点。ロンアガリならリーチのみで1300点。

アガリ確率の高いリャンメン待ち※4ではなく、ペンチャン待ちや、カンチャン待ちをビシッと一発でツモアガって満貫に仕上げる。

今まで受けたことのない、物凄い威圧感だった。

丸太のようなぶつとい腕で、待ちの悪いクソリーチを打ち込んできては、当たり前のような顔でツモアがる。何度も何度もそんな力強い光景を見せつけられた。

圧倒された。前に出ても前に出ても、ことごとく叩き潰された。そして打ち勝つてやろうと思っていたギラついた気持ちは、知らぬうちに憧れへと変わっていった。

本物だ……この人は本物だ……。

「綺麗な麻雀」ではない「力強い麻雀」。

放銃はしないけれど、アガリもないことを良しとしているような歯ごたえの無いプロとは訳が違う、根っこが凶太い麻雀だった。



# 「プロ」になりたい

その後、前原プロが店にやってくると、接客に集中できなくなった。

前原プロのドデカイ背中越しに、牌さばきを見学させてもらった。見れば見るほど、前原プロの麻雀に惹かれていった。自分の理想とする麻雀がすぐ目の前にあった。

とにかくリーチを打って、ツモり殺す。

一瞬たりとも相手にスキを与えない麻雀を、自分も打てるようになりたいと思った。

プライベートでも打たせてもらえるようになって2年ほど経った頃、前原プロから直接、プロ入りを勧められた。前原塾なるものがあるから、とりあえず一度参加してみないかという事だった。

麻雀プロになることを意識したのは、このときが初めてだった。

人に認められた。素直にそれがうれしかった。

新宿歌舞伎町にやってきて以来、閉ざしていた心の殻にヒビが入った。周りを反面教師

にし、自分を追い詰めていたものが氷解した。

大学を中退し、雀荘メンバーになるといふ、自らの意志で決断した道。その道の行き着く先に光が射した。

私のように、結果として選ばざるを得なかった立場に置かれた人間でも、心から目指したいと思えるものに出会えた。そこへ導いてくれる人に出会えた。

安穩と生活していた大学時代には無かった選択肢である「麻雀プロ」。

どんな世界でも生きていくのは容易ではない。それが勝負の世界となると、道は一段と険しい。でも険しい道だと感じるからこそ、歩んでみたくなった。

人に認めてもらえたことで、自分を認めることができた。

孤独の先に、光が射した。

【※1】放銃 アタリ牌を打ち込むこと。「フリ込む」とも言う。

【※2】一発 リーチをかけてから一巡目でアガった場合に発生する役。ツモでもロンでも成立。

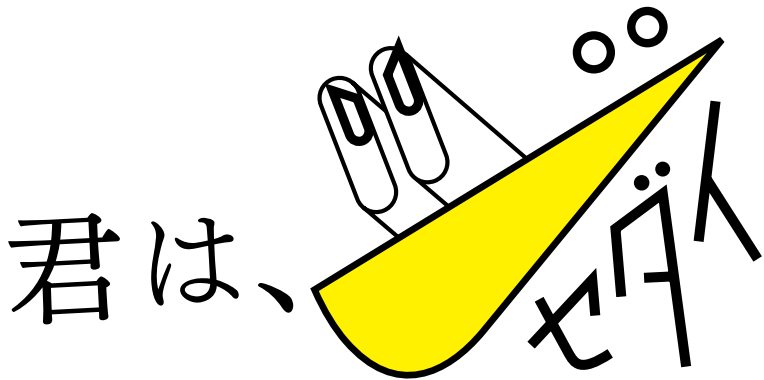
【※3】裏ドラ リーチをかけてアガった場合のみ、ドラ表示牌の下段にある牌もドラ表示牌として扱う

〔ルールによっては採用しない場合もある〕。

〔※4〕リャンメン待ち

数牌で





君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

### メインコンテンツ イベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

### ニッポンのスタートアップ

3年後に再会することを約束して行う、未来アポ付きスタートアップインタビュー！

### ジセダイジェネレーションズU-25

彼らはどうやって「闘う相手」を見つけたのか。各界の超新星に、その軌跡と未来を聴く。

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

# 行動せよ!!!